

自閉症児者に対する援助技術に関する研究

ー接近援助技術の技法に焦点をあててー

日本社会事業大学大学院社会福祉学研究所
博士後期課程 3年 山内 貴子

1. はじめに

近年わが国においては、平成17年の発達障害者支援法の施行をはじめ、発達障害者に対する支援が注目されてきている。なかでも自閉症は、「人間関係の障害」といわれており（石井2008）、その特性として1. 社会的相互交渉の障害、2. コミュニケーションの障害、3. 想像性の障害ならびに硬直した反復的な行動パターンというものがある。そして自閉症の障害特性に合わせた研究開発施策・処遇方法の充実のために、これらの特性等に適切に対応できる人的社会的資源が必要となっている。しかし現在、その人的社会的資源が乏しいという状況にあり、結果的に自閉症児者が地域社会から孤立する、あるいは行動障害等、2次的障害の発生により、家庭や地域生活が危機的状況に陥りやすいという状況が報告されている（小林1998、村上2008）。自閉症児者への理解や支援は必要であるにも関わらずその方法は専門的技術を要し、それを習得していない地域住民や保護者、援助の初心者にとって自閉症児者に対する理解や支援は容易ではないと考える。援助事例に関する先行研究においても、自閉症児者との初対面の関係形成において最初にどう関わるかという点で苦労しており、自閉症児に対し、関わりたいがあまりその自閉症児に走り寄り、その児童はパニック状態で逃げていってしまった、あるいは両手を差しのべてしまい、その児童は脅えた表情になった等、自閉症児を脅かしてしまったという事例が多数存在する。（石井1982、村上2008）。その中には28年前の事例も存在し、人間関係形成の最初期の援助として接近援助技術が長年にわたり試みられたこと、自閉症児者の安心感を脅かすことのない関係づくりの難しさが明らかになっている。自閉症を対象とする援助療法では、モデリン

グ、ミラリング等の応用行動分析に基づく療法、TEACCH教育プログラムにおける構造化等の援助技法が療育に取り入れられている。先行研究では自閉症児者に対する援助実践において、ある特定の療育プログラム（受容的行動療法等）を用いて介入し、その結果を検証するというものは多数存在するが、人間関係形成の導入部分において必要となる接近援助の仕方、あり方そのものに関する研究は少ない。

以上の問題意識より本研究では、自閉症児者を対象とする援助者の接近援助技術及び人間関係形成に関する援助技術を明らかにし、それを通して自閉症児者にとって他者との距離にはどのような意味があるのかを探ることを目的とする。この研究をもって、交流事業の主宰者や交流教育の教材を作る保育士・教員、自閉症児者に対する援助者、自閉症児者の保護者のより良い援助活動の一助としたい。

2. 言語の定義

本研究では使用する言語について以下のように定義する。

(1) 接近援助技術とは

接近援助技術とは、自閉症児者が自分の形成する世界に他者が入ることを認める状況を援助者が作り出す技術、かつ援助者が各自閉症児者の安心できる範囲・距離を見出す技術である。さらに、接近援助技術は自閉症児者の主体性・能動性と密接に関わっている。したがって例として距離を近づけようと、子どもの手を無理やり引っ張り子どもを引き寄せても、それは接近援助技術とはみなされない。接近援助技術に対する概念を図1に示す。

(2) 接近援助技術における距離とは

援助的な距離を指し、それを構成する物理的距離と心理的距離の両方を想定している。援助的な距離とは、各自閉症児者に対し最善の援助を行うと試みる目的で関わる際に、相手との間におく距

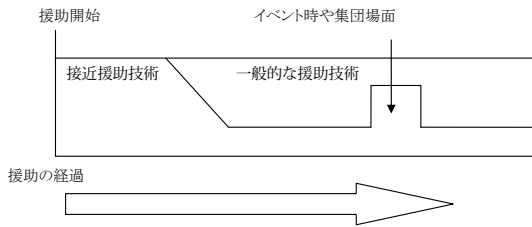


図1 接近援助技術の概念

離をいう。物理的距離とは方向や単位で表せる距離をいい、心理的距離とは、例として、援助の場面において各自閉症児者に対し「今は行動を要求せず待つ」「今はその自閉症児者の気持ちを優先する」といった、相手の内面の状態を視野に入れた配慮等を含めた哲学概念的距離をいう。

3. 調査

(1) 目的

一定期間援助経験を有する自閉症児者援助技術者に対し、実際の人間関係形成に関わる援助経験を聞き取り、その答えを整理する。そのことにより、自閉症児者に対する人間関係づくりに必要な援助を抽出する。それを基に接近援助技術をはじめとする直接援助技術の技法を探る。

(2) 対象

自閉症児者援助技術者15人に対する面接法に基づく調査

自閉症児者援助年数

A群：10年を超える援助者	5人
B群：5年以上10年以下の援助者	5人
C群：4年以下の援助者	5人

(3) 方法

自閉症児者援助技術者15人に対し、以下の質問項目をインタビューする。自閉症には、言葉がない、あるいはコミュニケーションのツールとして使うのが難しいカナタイプ、言葉をコミュニケーションのツールとして使えるが、相手の気持ちやその場の雰囲気を読み取ることが難しいアスペルガータイプが存在し、援助の技法もタイプご

とに変化すると仮定する。したがって、各質問をタイプ別に聞き取った。

●自閉症児者援助技術者へのインタビュー調査質問項目について

テーマ1：援助全般に関すること

- ①初対面の自閉症児者への人間関係形成の方法
まず、初対面の自閉症児者に対する人間関係づくりの難しさと工夫を教えてください。
- ②初対面以降での日常生活上の援助への導入と実行
 - A. 日常生活上の支援（作業の参加・食事など）を、あなたと対象児者で行う際、その誘い方と実行についての困難さと工夫を教えてください。
 - B. 次に、自閉症児者同士の関係を作っていく際の誘い方と実行についてお伺いします。日常生活上の支援（作業の参加・食事など）を、みんなで一緒に行う際、その困難さと工夫を教えてください。

テーマ2：接近援助技術やそのあり方

自閉症児者に対する距離の取り方について

- ①自閉症児者にとって相手との間にとる距離にはどのような意味があると思いますか。
- ②あなたの援助者としての援助における距離の取り方についてお伺いします。
 - A. 物理的距離：その利用者との位置関係・接近の仕方・方向についての工夫を教えてください。
 - B. 心理的距離：物理的距離とは別に心理的距離を縮める、心と心が交流できるという視点での援助の工夫を教えてください。
 - C. 本人が人に関わろう、接していこうとするとき、本人の主体性や能動性が関係すると思うのですが、本人の人間関係を形成しようという主体性や能動性の発揮のさせ方について、工夫があれば、教えてください。

4. 分析方法

KJ法

調査によって得られた情報をKJ法により整理し、自閉症児者に対する直接援助技術及び接近援助技術の技法に関するキーワードを抽出した。なお分析の際は著者を含めた社会福祉学を専攻する大学院生5人で行った。

5. 分析結果

(1) KJ法による分析結果1（一部）

表1に、分析結果の一部を記載した。小項目が援助者の実際の声である。「子どもに合った距離を見抜くことが難しい」「ちょっと距離を置いた方が良い子もいる」「ある程度そばに居ても大丈夫な子もいる」これら3つの援助方法を分析者5人で命名し「自閉症児者に合った距離の取り方の困難性」という中項目ができた。また、「近づくと逃げられた」「その子に接するとき、どういふふう近づいていったら良いかわからない」という小項目を命名し「自閉症児者への接近方法を見立てることの困難性」という中項目ができた。そしてこれらの中項目から「人間関係構築における距離の取り方や接近方法の判断の困難性」という大項目が命名された。

(2) KJ法による分析結果2（一部）

分析結果1より抽出した中項目をとりあげ、一定の援助者の援助体験に基づいた援助技術集を一部作成し、表2に記載した。これにより、A群B群C群がどのような援助の難しさを感じているのか、そしてその際どのような援助を工夫していくのかを見ることが出来る。「初対面の自閉症児者に対する人間関係形成について」という質問を見ていくと、カナータイプについてA群では、難しさとして「自閉症児者に合った距離の取り方の困難性」「自閉症児者への接近方法を見立てることの困難性」を感じており、その際の援助としては「自閉症児者の気持ちになる」「自閉症児者の安心感の提供」「自閉症児者の気にならないように居る」ことが分かった、B群では、難しさとして「人に関する緊張感の強さ」「子どもの警戒心や不安の感じやすさ」を感じており、その際の援助としては「距離をおいて観察」「子どもの遊びの共有」「援助者は脅かす存在じゃないことの提示」を行うことが分かった。C群では、難しさとして「自閉症児者が何を伝えたいのかの理解の困難性」「最初の距離の取り方の困難性」を感じており、その際の援助としては「自閉症児者の表情や視線による気持ちや訴えの判断」「同じ言葉の繰り返し」「わかりやすく伝える」ことが分かった。

表1 A群の下記質問における分析（一部）

質問：カナータイプにおける初対面での人間関係形成の難しさ

大項目	中項目	小項目
人間関係構築における距離の取り方や接近方法の判断の困難性	・自閉症児者に合った距離の取り方の困難性	・子どもに合った距離を見抜くことが難しい。
		・ちょっと距離を置いた方が良い子もいる。
		・ある程度そばに居ても大丈夫な子もいる
	・自閉症児者への接近方法を見立てることの困難性	・近づくと逃げられた。
・その子に接するとき、どういふふう近づいていったら良いかわからない。		

表2 自閉症児者に対する人間関係形成における援助技術集（一部）

質 問	A 群	B 群	C 群
初対面の自閉症児者に対する人間関係づくりについて	<p>難しさ (カナタイプ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自閉症児者に合った距離の取り方の困難性 ・自閉症児者への接近方法を見立てることの困難性 <p>工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自閉症児者の気持ちになる ・自閉症児者の安心感の提供 ・自閉症児者の気にならないように居る 	<p>難しさ (カナタイプ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人に関する緊張感の強さ ・子どもの警戒心や不安の感じやすさ <p>工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・距離をおいて観察 ・子どもの遊びの共有 ・援助者は脅かす存在ではないことの提示 	<p>難しさ (カナタイプ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自閉症児者が何を伝えたいのかの理解の困難性 ・最初の距離の取り方の困難性 <p>工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自閉症児者の表情や視線による気持ちや訴えの判断 ・同じ言葉の繰り返し ・わかりやすく伝える

6. 考察

この研究の結果、接近援助技術におけるA群B群C群の変化を見ていくと、表1ではA群が経験するカナタイプに対する初対面での人間関係形成の難しさの1つとして、「人間関係構築における距離の取り方や接近方法の判断の困難性」が明らかとなった。これにより接近援助に関しては援助経験を積んでいても、容易になるわけではないことがうかがえる。また、表2のような援助技術の難しさ群と工夫群を見ていくと、A群B群C群共通して、初対面の人間関係形成の難しさを感じている。A群とC群は自閉症児者との距離の取り方に援助の難しさを感じており、B群は自閉症児者の気持ちを図る部分に援助の難しさを感じている。援助の工夫としては、A群は自閉症児者の気持ちに働きかけ、C群はその気持ちを表情や視線を見て判断を試みている。それに対し、B群は距離を置いた観察や、遊びの共有等、より具体的な援助を試みている。このように援助経験年数によって、援助に様々な特徴の違いが見られた。また、援助技術には、「わかりやすく伝える」「観察

する」などの具体的かつ方法論的援助によるものと、「自閉症児者の気持ちになって考える」などの目には見えない哲学概念に関する技術など、複数の視点が存在した。援助技術の視点は1つに限らずいくつかの要素で構成されていることが明らかになった。表2のような自閉症児者に対する人間関係形成における援助技術集はこの研究で得られる重要な知見の1つである。援助技術の難しさ群は、自閉症児者の援助をする際の「困難性の見通し」に役立ち、経験者の援助技術における工夫群は、自閉症児者の援助をする際の「援助法の方角性を見出す」ことに役立つと考える。

7. 今後の課題

本研究では、援助者に対するインタビュー調査をもとに援助者がこれまで作り上げてきた自閉症児者への援助を整理していった。しかし今回は提示できた知見は研究の一部である。今後研究の課題として取り組むべきことに分析区分と調査対象人数についての検討が挙げられる。援助者が行う自閉症児者に対する援助は、経験年数だけではな

く援助経験施設の種類や形態によっても差異がみられると考えられる。今後は援助者が自閉症児・者どちらの施設の経験者なのか、入所施設の経験はあるか等、分析区分を増やし精査していきたい。そして、調査対象人数についても追加することを検討し、本研究結果の信頼性を高めたい。

参考文献

- 1) 日本自閉症協会の要望 平成20年 石井哲夫
- 2) 自閉症の人々にみられる愛着行動とコミュニケーション発達援助について 1998 小林隆児 東海大学健康科学部紀要第4号 P63-75
- 3) 自閉症の現象学 2008 村上晴彦
- 4) 自閉症児の交流療法めばえ学園と袖ヶ浦のびる学園の実践から 1982 石井哲夫 東京書籍